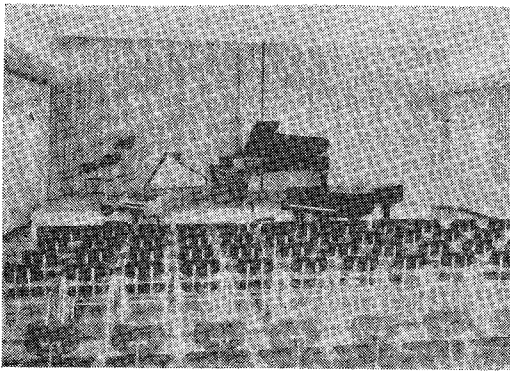


欧米のヴァイオリン教育について

(欧米旅行で感じた事)

東 儀 祐 二

約一ヶ月半のあわただしい旅行から帰って来て何か一つまとまったテーマで書けとの事だが唯行って来ましたと云うだけで学校の視察や演奏会もシーズンから外れていて聞けなかつた所も多いが感じたままの事を書きしるして見ようと思う。



ストットガルト・ホッホシュールのオーケストラ室

ヨーロッパは学校がすべて十月から始る。其の為九月中旬に日本を発つた僕達「鷲見三郎氏(桐朋音大教授相愛講師)、久保田良作氏(桐朋講師ジュピタートリオ主宰)の三人はアムステルダム、ハンブルグ、ベルリンと其の様なチャンスが無かつたが、ストットガルトに去年迄、芸大の講師をしていたミューラー氏がいて、まだ始つてはいなか

つたがストットガルトのホッホシュールフェールムジークを案内して呉れた。やはり戦災で大部分破壊されたが新しく作りなおしたような建物で、ストットガルトは坂の多い町だが其の真中にある。四階建てで大きさは丁度相愛の本館講堂のある建物位で一階の真中に入口があり一階は入って右側に学生の控室食堂等、左側には壁一面に鏡の張つてあるリトミックの部屋があり、廊下の向側には男女に分れたシャワールームまである。二階から上はレッスン室でエレベーターは二ヶ所あつて一つはピアノ運搬用、階段は螺旋階段になつていて各階段の所にロビーがあり、事務所は三階にあつた。各レッスン室は日本のと変りはないが、唯アップライトピアノは一つも無く全部グランドピアノばかりだつた。その他、パイプオルガンの室、(チェンバロ)の室等はやはり日本ではまね出来ない設備だと思つた。後は四階にオーケストラの練習室、オペラ練習室等大きくはないが其れ専用の部屋があつた。

ストットガルトの音楽学校は授業はまだ始つていないので設備だけしか見られなかつたが日本のと比較して色々参考になつた。

ミューラー氏にパンフレットをもらって色々質問したが、音楽学校の内部機構にも幾種類もあって、いわゆる演奏家を養成する本科、実技の教育家を養成する教職科、義務教育の先生を養成する科等、その他カソリック、プロテスタントの音楽を専攻する科やリトミック科等もある。教会音楽の科はオルガンや合唱の指揮等を学び、いわゆる典礼学（昔の儀式の作法）等も勉強するようである。

リトミックもアメリカにはなくヨーロッパの特徴なのだろうか、舞踊の基礎科目の先生養成の為かよくわからないがやはり入学試験にはピアノもバッハの平均率やクラシックのソナタ位の曲を奏けなければいけない。入学すれば普通の音楽の勉強をし、リトミックの勉強も自分で振り付けをする単位もある。

本科は作曲、指揮、声楽、器楽で器楽の中に、ピアノ、オルガン、チェンバロ、ヴァイオリン、ヴィオラ、セロ、ヴィオラダガンバ、コントラバス、管楽器、ハーブ等にわかれている。年令は十六才から二十五才迄、日本の昔の中学からすぐ行けた旧制音楽専門学校の年令である。入試の課題はヴァイオリンで云うと、エチュード「クロイツェル或は「フィオリロ」から一曲、モーツアルトのソナタカシューベルトのソナチネから一曲、ローデ、ヴィオッティ、ハイドンのコンチェルトから一曲、その他小曲の初見試奏があり、程度としてはそれ程難しくはない。

その他ピアノ科は前古典「バッハのインベンション」の二声から一曲、古典「ハイドン、モーツアルト、ベートーヴェン、シューベルトのソナタから一曲、ロマン派「ブラームスシューマン、シヨパン」か

ら一曲、近代ピアノ曲から一曲その他やさしい新曲となっている。

実技教育科、義務教育科も入試課題は同じである。

ミューラー氏は日本の音楽学校はどうして入学試験に難しい曲をさせるのだろうと云っていた。確に日本では初歩的な曲からいわゆる勉強の為の協奏曲をやらなくても難しい曲をやる、中間的な曲が少ない、其の為に色々無理が出来る。特にモーツアルトの協奏曲を非常に早くやるが、これは才能教育の弊害でとんでもない飛躍だと思う。ヘンデルのソナタから一気にモーツアルトだと其の間のヴィオッティ、ローデ、クロイツェル等の大事なエチュードコンチェルトが全然抜けている。氏の言はその点を指摘したものだと思う。

入学試験はその位だが最低四年間在籍せねばならず、毎年度末に単位試験がある。

そして卒業試験が大変で試験の六週間前に生徒が自分の奏ける曲の中からクラシック二曲、ロマンティック二曲、現代曲二曲を提出し、其の中から一曲ずつ課題される。その他先生に全然指導を受けられない曲を一曲課題され、それにもう二曲オーケストラ伴奏の曲を奏かねばならない。膨大な数である、これだけの曲を奏きこなし、先生方が一人前の音楽家として世間に出られると認めれば卒業出来る訳である。日本の音楽学校となんとへだたりがある事だろう。然しこれが本当ではなからうか。

実技教育科義務教育科には卒業の時の演奏はない其のかわり授業の方に、スコアリーディングや合奏指導等、実際に卒業して役に立つ課目をやらされるわけである。

も一つ、私を感じた事は日本の専門教育はかたより過ぎていると云う事だ。例えばヴァイオリンだけは奏けても其の他の音楽知識と云うか、肉付きが足りない。勿論西洋音楽であるし、日本にとっては輸入したもので、例えばドイツ人がベートーヴェンを理解出来るのは同じ国に生れ其の風俗環境に育つて来た丈に優利には違いないが、それだけに日本人はそれ以上の知識の吸収が必要ではなかるうか。それを音だけで吸収しようとすると非常に危険である。その曲を作った時の社会的背景、他の曲との連り、其の時の作曲者の気持、意図等考えないで奏いているのでは一種の片輪の様な気がする。其の点、斎藤先生の演奏解釈の講義は其の様な欠点を補う最大の効果を上げているのではないだろうか。

ストウツトガルトの音楽学校はあくまで外見的なもので授業の内容は解らないがベルリンで、ベルリンフィルに唯一人の日本人でヴィオラで入っている土屋氏に聞いた所では、ドイツにはベルリンの他六つ程(ケルン、ミュンヘン、フライブルグ、ストウツトガルト、ハンブルグ)ホッホシューレがあるが、例えばヴァイオリンにすれば教授陣容は何処のホッホシューレがよいと云うそれぞれの特徴があつて、却つて中央のベルリンやハンブルグ等より田舎のフライブルグにサンドル・ベークと云う今のドイツでは最上と思われる先生がいるそうである。其の他ケルンにはロスタール。デットモンドに、ハンガリー人でヴァルガ(Varga)、ザールブルッケンに、ブース等、音楽学校でなくて個人教授で秀れた先生が居ると話して呉れた。

ドイツでは其の他に南のオーストリアとの国境近く、ミュンヘンか

欧米のヴァイオリン教育について

ら汽車で二時間程行った、ミッテンヴァルト(Mittenwald)と云う所に国立のヴァイオリン製作学校がある。其処はもう始つてはいたが、行つたのが日曜日で又授業は参観出来なかつたが日本から唯一人、入学している無量塔氏に学校内を案内してもらつた。

ミッテンヴァルトはもうアルプスの一部、所謂チロル地方で小さな町だがすぐ近くに何か吸込まれる様な魅力のある山が聳えている昔からヴァイオリン製作で有名な町で町の真中の教会の前にマティアス・



ヴァイオリン製作学級のあるミッテンバルト

クロツ(有名なヴァイオリン製作者)の銅像があり丁度日曜日なので教会の前に所謂チロリンハットを被り、緑色の皮のチヨッキを着たチロルの服装をした人達が一杯集つていた。

ヴァイオリン製作学校は其のすぐ近くにあり二階建てで小ぢんまりとした感じである。生徒

の数は全部で三十人位だそう。一階に大きな基礎工作の部屋があり、表板に使う近くに取れる松の一種や、裏板に使う楓の板等がごろおいてある。この部屋で約二年間修業するのだそう。二階には仕上の部屋やワニスの部屋がある。此のニスはヴァイオリン製作にとって非常に大切な部門でこれによって音色等さま。又二階の廊下に乾燥中の楽器が一杯ぶら下っていた。これも必要な事で其の地方の氣候、湿度等大きく影響する訳で天氣のよい時に外に出して乾燥させるそう。日本の氣候は此の点一番製作に向かない訳だ。此の学校で四年間修業して一人前の製作者としての資格が与えられるのである。

ドイツは此の位にして後イタリアに渡った。そして十月三日からジュノアで目的のバガニーニコンクールが始った。

バガニーニコンクールは勿論国際コンクールでヴァイオリン丈しかやらない特種なコンクールだが格の上からすると所謂三大コンクール（ベルギーのエリザベートコンクール、ロシアのチャイコフスキーコンクール、フランスのロン・ティボーコンクール）より一段下に見られているそうである。

審査員は全部で八人、内四人がヴァイオリスト（ベルギーのグルミヨ、日本の鷲見先生、イタリアのカルミレリ、アメリカのシゲツティ）と後四人は作曲家で構成されている。二十五人応募して第一予選で十二人になり第二予選で六人残り、本選で四位まで受賞された。世界各国人が集ったが、日本人は広瀬悦子さん、田中伸道君、磯英男君と三人受けて磯君が第二予選で落ちた。本選の六人はフランス二名、アメリカ二名、日本二名で其の内フランスの女性が一位、二位が

広瀬さん、三位が矢張フランスの娘さん、四位がアメリカ人、男性は二人共落選で女性オンパレードだった。四位のアメリカ人は音は大きいが弦がゆるんだり、止ったりで全然だめだと思ったのに入り、何時でもコンクールと云うものは何か政治的なものが入り公正な判断かどうか疑問に思った。

三日から十日迄一週間の間に奏く曲が大変でまず第一予選にはナルディーニのソナタ（二長調）全曲、バッハの無伴奏ソナタ第一番から一・二楽章、バガニーニのキャプリース二十番と一人三十分位。第二予選ではモーツアルトのコンツェルト三・四・五番の内より一曲、全楽章。バガニーニのキャプリースより自由曲、二曲、バガニーニのピアノ伴奏付の小品一曲（鐘、モーゼファンタジー等）シマノフスキーの夜想曲とタランテラで一人一時間はたっぷりかかる。そして本選にピアノ伴奏の自由曲（皆ベートーヴェン、ブラームス、チャイコフスキーの協奏曲を奏している）とバガニーニの協奏曲一番の一楽章をオーケストラの伴奏で奏く。これ丈の曲を勿論暗譜で一週間に奏くのだから準備も大変だし技術や音楽性以外に殊に大変な気がなければとても出来ないと思った。其の点日本のコンクールは時間を出来る丈短くしようとして反対の方向に進む様な気がする。特に学生コンクール等、五分もかからない曲を半年も前からそれだけやっている様な愚かな事は其の曲だけ上手になっても、もっとやらねばならぬ事が多くあるのに無駄な事だと思った。

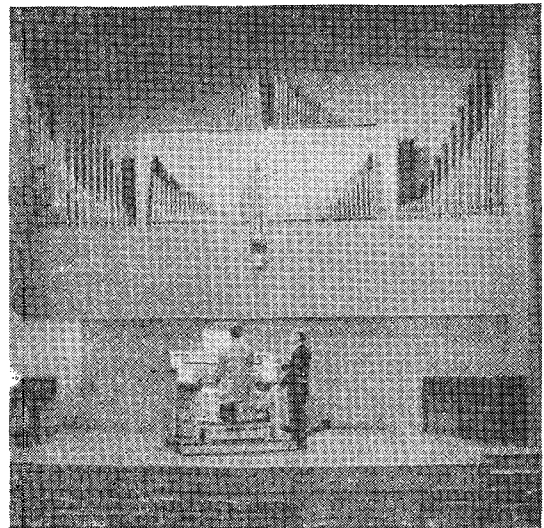
バガニーニコンクールを受けている人達は第二予選の一時間ぶっ続けに奏いてもそれが当然の様に奏きまくってしまう、そのスタミナに

僕は驚異の念を抱いた。音楽性其のものは日本人以外は何か大きっぱで細いニュアンスとかフレージング等割合無神経に奏いてしまう様に感じたが、一曲奏き終って見ると何か力強い個性のにじみ出たままだった印象が残る。反対に日本人は隅々まで神経の行き届いたよく曲を理解した演奏だと思ふのだが曲が終った時の感じは、力の弱い枠にはまったものとなる。これは僕だけが感じた事かも知れぬが日本の先生は曲を細くつつき過ぎるのではなからうか。其の為生徒の持つている個性をだんだん一つの先生の頭に描いている理想の枠の中にはめ込んでしまうのではないかと思う。又反対に矢張日本人はまだ模倣の段階から抜け切れないのかも考えたが、自分には判断がつかない。

後フランス、イギリス、アメリカと渡ったがパリではコンセルバトワールの入学試験の時で見学出来ず、イギリスではロイヤル・アカデミー・オブ・ミュージックと云うロンドンで一番良い音楽学校を見学しヴァイオリンのレッスンも見せてもらった（モーツアルト・バッハ・ヘンデル等を聞いた）が、程度が低く始め副科のレッスンかと思つた位だ。偶然下手なのばかり聞いたのかも知れぬが、我が相愛学園のヴァイオリン科のレベルの方がずっと高い。只、設備はたいしたものので、それより、三時に先生の所へ給仕がお茶を持って来たのには「ああ、いいなあ。」と思つた。

最後にアメリカであるがニューヨークのジュリヤードとフィラデルフィヤにあるカーチスの二つの有名な音楽学校を見学して来た。

井口先生と連絡がとれて一緒にジュリヤードに行つたがリパーサイドの静かな環境の所だが今度市の真中に引越すそうだ。土曜日で子供



ジュリヤードのパイプオルガン教室

教室の様なのをやっていた。始め理論の部屋を見せてもらったがオーケストラの管楽器の移調をやっていた。大分難しく日本では大学でもやるかしらと思つた。其の後弦

楽合奏の小学生位のクラスと中学生のクラスと二つ聞いたが演奏自体は桐朋や相愛の方がずっと上手だが先生の説明が長く、それも生徒に質問して答えさせたり奏く丈でなく基礎的な知識を頭に入れさせる様にしむけている様に感じた。曲もクラシック・バロック、近代と多くの曲を少しづつやらして、又、初見の練習をさせてレパートリーを多くさせる方法に思えた。

一方カーチス音楽学校は公園の近くのしつとりと落ち着いた感じのしよしゃな建物でジュリヤードの半分位の大きさで内部は全部赤いじゆうたんが敷きつめられたどっしりした十九世紀的な感じである。校長のジンバリスト先生や有名なガラミヤン先生それに江藤俊哉氏の後

任のシムスキー先生にお会いし、又、それぞれのレッスンも聞かせてもらったが矢張最高の印象を受けた。日本からの留学生で鈴木秀太郎君や二宮さん姉妹等のレッスンは聞かせてもらった。皆上手なせいかもしれないが一時間のレッスンは大体大きなコンツェルトやソナタを全曲伴奏付で奏いて適切な注意を受け其の他にバッハのソロソナタやガビニエ等受ける。これも勉強する量は大変なものだ。日本の様に一曲の一章を幾つにも分けて少しずつしか進まないのではどうにも仕方がない。矢張勉強しなければならない様に持って行かねばとつくづく思った。

それと設備であるがアメリカの学校は金も多くあるのだからヨーロッパより、より多くそろっている。尨大な数の図書、全部グラランドピアノの練習室。カーチスでは生徒の家にピアノも貸してくれるそうで図書等も全部無料で貸出出来る。日本で何が不足してると云ったら、まず第一に設備と云いたい位だ。

日本のヴァイオリンのレベルはもう決してひけを取らない所まで上って来ているし、日本で基礎的な事は充分勉強出来るがも一つ上の国際的なものに行くのだったらアメリカが良いのではないか。ヨーロッパには其の国々の作曲家の真の意図を理解する為に修業に行くには良いが基礎的なメソッドの勉強するには、かたよりすぎるし、いい先生はアメリカに渡ってしまったのではないかと云う所だと思ふ。

(本学助教教授—ヴァイオリン)